



豊平区東月寒地区を流れる吉田川に吉田の名をとどめている

藩の廃止で北海道に移民

吉田善太郎は文久元年(1861)に陸奥国南岩手郡上田村に生まれた。吉田家は代々南部藩に仕える藩士だったが、明治維新で藩が廃止されたため職がなくなり、生活が非常に苦しかった。

北海道開拓使の移民募集に応じて一家は岩手を離れ、明治4年(1871)4月7日に札幌に着いた。善太郎は10歳だった。札幌郡月寒村東10番(今の月寒中央通7丁目・月寒公民館付近)に住み、父は木炭製造業を営んだ。

畑を広げ自作農を育てる

明治14年11月、善太郎は20歳で父を失い、家業を継いだ。その時の財産は、わずかに家屋1棟、土地2.5町歩(約2.5ヘクタール)、馬5頭だった。

その後必死に働き、月寒や二里塚(今の北野)などで農業をあきらめた人々の土地を譲り受け、明治20年には開拓使から大谷地の土地23万余坪(約77ヘクタール)の貸し下げを受けた。

当時の大谷地低地は一面のアシ原の湿地帯で、丘陵地にはカシワやナラの大木が茂っていた。所有地は現在の豊平の福住、月寒東から北野、清田、さらには大谷地(現在の下白石バス停あたり)まで広がり、水田は70町歩、畑地は60町歩、小作人は30数戸にもなった。

さらに、独立心のある小作人には土地を譲って多くの自作農を育てた。

灌漑用水を造り水田が发展

明治21年4月(1888・27歳)、永住の地となった大谷地に移り住んだ。今の栄通18丁目で、池に面した2階建ての大きな家だった。

明治24年ころに月寒村厚別(今の清田)の住民が利用する道路用地を提供し、また、2万円をかけて、後に「吉田用水」あるいは「善太郎用水」と呼ばれた灌漑用水路を作った。この水路は国道36号の旧道に架かる厚別橋の下流300メートルの地点を基点とし、現在の清田区清田1条1丁目(コカ・コーラボトリング裏手)から、大谷地小学校東側を直進、函館本線を横断するもので、機械力のない時代に、幅4メートル、深さ2メートル、延長6キロメートルの水路を、地主・小作人40～50人がスコップ・島田鍬を使い、4カ月で完成させた。

この用水路完成で米づくりが盛んになり、200ヘクタール以上もの水田ができ、この地域は北海道の稲作の発展に大きな役割を果たした。また、この大事業を後世に伝えるため、大正8年(1919)10月に基点の場所に「吉田用水記念碑」が建立された。

時代変わり水田から宅地へ

用水は水利組合で管理されてきたが、

かんがいようすいろ 稲作に貢献した吉田善太郎 灌漑用水路を造り、北海道の





昭和 23 年頃米軍撮影の航空写真で見る吉田用水。用水路は青色で示したが、すべてが吉田用水かどうかは分からない



吉田善太郎

子息をアメリカ留学させ 酪農にも力

また善太郎は明治30年(1897・36歳)、

昭和 40 年代に入ると北野地区の宅地化が急速に進み、この水利組合は昭和 48 年(1973)10 月、水田農家^{やそじま}八十島勝義が離農したことで働きを終えた。

薪炭用に使っていた大谷地や月寒の丘陵地を切り開いて牧場にし、乳牛の品種改良に尽くした。息子の善助をアメリカへ留学させ、明治末期には牛 20 頭を一度に輸入し、記念としてモダンな洋式の家を建設したが、この建物は八紘学園に栗林記念館として保存されている。大正 5 年に 56 歳で白石の家で亡くなった善太郎の遺志を継いだ子息は白老町で社台ファームを経営し、全国的な牧畜企業として成長している。

善太郎が所有していた通称「吉田山」の名は、善太郎と親しい間柄にあった

連隊長が軍用地寄付などのお礼の意味で当時の地形図作成の陸軍参謀本部に上申し、5 万分の 1 地形図に記載されていたが、住宅地になるとともに地形図から消えた。しかし東月寒地区と北野地区の間を流れる吉田川は現在も住宅地の中を流れ、吉田の名をとどめている。

(塩見一釜)